

平成二十八年年度	土佐塾中学校入学試験問題（県外Ⅰ）	国語	7枚のうち1枚目
----------	-------------------	----	----------

解答はすべて7枚目の解答用紙に記入しなさい。

受験番号

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

皆さんは毎朝、皆さんの学校までの道のりを歩いてくる。大抵は友達と一緒ににぎやかに歩いてくるのかもしれない。だが遅刻して一人で登校する日もあるだろう。「自分はなぜこの学校に通っているのだろう。①どうして勉強しなければならないのだろう」なんて思いながら。立ち止まって振り返ると、遠くに広がる緑豊かな風景が眼に入ってきたりする。青空が広がっていたり、鳥がのびのびと飛んでいたりする。耳を澄ませば、※¹路傍の草むらから虫たちの声が聞こえてくるだろう。その光景の中で一人、皆さんはこんなふうに思ったかもしれない。

「世界があり、その中で僕は生きている。けれども、あの鳥と僕はどこが違う。鳥は、だれにも妨げられず自由に空を飛んでいる。しかし自分は制服を身にまとい、学校へ向かわなければならぬ。どうしてあの鳥のように、自由に生きられないのだろう」と。

②自分と世界の関係が、鳥が空を飛んでいるようにはびつたりと感じられない。ほんのわずかな、しかし自分ではどうしようもない宿命的なズレ。自分がこの世界にいるということがとても不思議な、奇妙なことに思えてくるのだ。同時に強い孤独感が押し寄せてくる。周りには家族も友達も、学校の先生たちもいるが、「自分一人でここに生きている」という感覚だ。知らないふりをしているといけない。よく思い出してほしい。感じた覚えがきつとあるはず。こうした感覚は大人になると失われてしまう。けれども実は③この感覚こそ、学ぶことの※²根拠に触れている証拠であり、あらゆる未来の「種」を生み出すキテンにほかならない。

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を※³対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、とりわけ若い皆さんが世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。例えば、森を切り拓き、田畑をつくる。これこそ④人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証拠なのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、（孤独ではあるけれども）自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

Ⅰ 現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で、フクザツだ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならぬ。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならぬ。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した※⁴体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星のウンコウから暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や※⁵狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人ではどうして学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。例えば、脳の「海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深处で「新生ニューロン」という神経組織を生成している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競っているという。

Ⅱ、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かという点、⑤現実はどうなっていない。実は新発見というものは、発見者が一五〜一六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。Ⅲ、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが※⁶端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。※⁷膨大な知識の体系に分け入った若者は、それをA骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで環境に適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

物理学者のある友人は、高校で教わった「虚数単位」が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位はマイナス1の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三〇年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を発明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それがB花開いたのだという。

「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性

でもある。学校では「※」という雰囲気^{ふんいき}が形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことになるかもしれない。（中略）

学ぶということから、人間は逃れ^{のが}られない。人間のニューロンは、歳をとつても少しずつ新生し続けるという。どうやら我々は生物学的にも学び続けることを運命づけられているようだが、人間は、自己の非自然的なあり方に由来する「自由」のもとに学ぶからこそ「人間」なのだ。言い換えれば、学ぶことは、自分が人間として今ここで生き、存在しているということと分かちがたく結びついている。しかしその学びは、決して完成しない。ひとたび完成したならば、次なる完成に向けて自分自身をつくり替えながら学んでいかななくてはならないから。その意味で人間とは、「途上^{とじょう}の存在」にほかならず、常に道^{みち}半ばなのである。学ぶことは、自分をつくり替えることであり、世界をつくり替えること。今このことを感覚できればそれが一生の力になるだろう。

（講談社 『何のために「学ぶ」のか』（中学生からの大学講義） 1 小林康夫「学ぶことの根拠」より。文章の一部を改めています）

（注）※1 路傍^{ろぼう} Ⅱ 道ばた。 ※2 根拠^{こんきょ} Ⅱ もとになるもの。

※3 対象として捉える Ⅱ 個人的な感情や意見にとらわれないで、事^{こと}がらを理解しようとする。 ※4 体系^{たいけい} Ⅱ 一つのまとまり。

※5 狩猟^{しりやう} Ⅱ 野生の鳥やけものをつかまえること。 ※6 端的^{てんてき}に Ⅱ はっきりと。 ※7 膨大^{ぼうだい} Ⅱ 大量。

問一 Ⅱ 部 a Ⅲ e のカタカナは漢字に直して、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 Ⅱ 部 A 「骨肉化」、B 「花開いた」について、本文中の意味として最も適当なものを、次のアⅢエの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「骨肉化」	ア 分解する。	B 「花開いた」	ア 困難にたえた。
	イ 固定する。		イ 成果をあげた。
ウ 習得する。	エ 増大する。	ウ 自由になった。	エ 納得がいった。

問三 Ⅱ I Ⅲ に入る最も適当な言葉を、次のアⅢオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア つまり イ たとえば ウ しかし エ あるいは オ たしかに

問四 Ⅱ 部 ① 「どうして勉強しなければならぬのだろう」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のアⅢエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

アのびのびと空を飛んでいる鳥のように、人間の自分たちも真の自由と世界との調和を目指して生きていくことが必要だから。
イ 私たちが人間として存在するためには、学び続けることによって絶えず自分自身をつくり替えていかなければならないから。
ウ 狭い世界に生きる他の生き物とは異なり、広い世界で生きる人間は絶えず変化をし続けて歴史を作らなくてはいけないから。
エ 人間がつくり出したものは数多くあり、今までにない新しいことを考えることによって脳の神経組織が生成されていくから。

問五 Ⅱ 部 ② 「自分と世界の関係が、鳥が空を飛んでいるようにはびつたりと感じられない」とありますが、それはなぜですか。「Ⅲから。」に続くように、本文から二十字で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問六 Ⅱ 部 ③ 「この感覚」とありますが、どのような感覚ですか。「Ⅲ感覚。」に続くように、本文中の言葉を使って二十字以上二十五字以内で答えなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問七 Ⅱ 部 ④ 「人間だけが持っている自由」とありますが、どのような自由ですか。「Ⅲ自由。」に続くように、本文から十五字以上二十字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問八 Ⅱ 部 ⑤ 「現実はそのようになっていない」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のアⅢエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歳をとると若いときより物事に慎重^{しんちょう}に対応するようになるので、アクシデントを上手に利用することができるから。
イ 世界には人間がつくり出した物が数多く存在し、人間が学べるスピードをはるかに超えて今も増え続けているから。
ウ まだ経験を十分に積んでいない若者にとっては、正しく学ぶことは難しく知識の多さがかえってじやまになるから。
エ 若さには「知らない」ことが多いという弱点があるが、世界を変える力という点で大きな可能性を秘めているから。

問九 Ⅱ ※ に入ることをばを十字以内で答えなさい。（句読点は必要ありません）

問十 次のア～オの文について、本文の内容と合っているものには○、まちがっているものには×をつけなさい。

ア 友達と離れて一人になったときにふと感じる違和感や寂しさは、思春期から芽生える感覚で大人になった証拠である。
イ 第一段階の学びを終えた人間は様々なものを生み出していて、それを学ぶためには多くの知識を整理する場が必要だ。
ウ 分らない・どこか引つかかるという感覚を持ち続けることは、探究心を育むと同時に何かを成し遂げる力にもなる。
エ 様々なことが制限され閉じた世界に生きる人間は、空を飛ぶ鳥や草むらで鳴く虫たちに自分たちの理想を重ねている。
オ 失敗は成功への近道であり、私たちの世界をより豊かにしていくためにも「知っている」ことに満足してはならない。

問題二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ミツルは七年前に妻を病気で亡くし、一人息子のトオルを育てている。二年前に知り合ったサチコと結婚を考えていて、今は三人で一緒に暮らしている。野球が大好きなミツルの影響を受け、七才のトオルも三週間ほど前に少年野球のチームに入った。仕事から帰ってきたミツルはその晩、サチコからトオルが初めて試合に出られることになったと聞いた。

「へえー、あいつが試合に出るのか。見てみたいな」

「トオル君が見にきてほしいって言うまでグラウンドには行かない約束でしょう」

「そうだけど遠くからでもこっそり見てみたいな」

「男同士の約束でしょう」

「そうだな、約束だからな」

サチコは空地で聞いた※₁一人の会話をミツルに話した。

「へえー、友達か。そう言えば友達がいなかったな。初めての友達じゃないか。友達と約束したのか……、どんな子なんだろう？」

翌夕、トオルは※₂帰ってきた。オヤツのパンケーキが食卓の上に置いてあると言っても生返事をするだけだった。

「さあ早くユニホームを脱いで着換えてきなさい」

「ねえ、善さんの家にいつてきていい」

「だめ。今日打てなかったからでしょう。善さんにまた教えてもらおうの？ 善さんが居れば打てるんじゃないのよ。トオル君が自分で打つんだから。じゃ今日私が一緒に練習してあげる」

「えっ、サッチちゃんが」

「そうよ。こう見えてもソフトボール大会でホームランを打ったこともあるんだから。そのかわり今夜は駅前でハンバーガーだよ」

「うん、その方が好きだもの」

二人は空地に行き練習をはじめた。思ったよりブキヨウな子だった。トオルはミツルの運動音痴の血を引いたのか、サチコの目から見ても運動神経が鈍いように思えた。それでも何度も続けてサチコがボールを投げてやると打球は少しずつバットの芯に当たるようになった。そう、その感じだよ、トオル君、いいぞ。日が暮れるまで二人は練習を続けた。

駅前のハンバーガーショップに二人して車で出かけた。河原の※₂堤で花見をしながら食べることにした。堤に座ると川風が心地良かった。①対岸に咲く桜の花に照明が当たり、絹の衣が揺れているようだった。

「②ねえ、どうしてそんなにホームランが打ちたいの？」

「……………」

トオルは何も答えなかった。善さんには話せても自分には話してくれないことがサチコは少し淋しい気がした。トオルはハンバーガーを手に持ったまま対岸をじっと見ていた。

「ねえ、秘密を守るって約束してくれる？」

「秘密？ うん、守るって約束するわ」

「実は三人で約束したんだ」

「三人って？」

「ソウ君と、ソウ君のおねえさん」

「友達なの？」

「うん。サッチちゃんのお母さんが家に来た日にグラウンドの草の中で人形を見つけたんだよ。綺麗な青いガラスの人形で……」

トオルはこの二週間に起った奇妙な出逢いをすべて話してくれた。

その話を聞いてサチコは驚いた。人形を交番に届けたトオルの姿は目に浮かんだが、少女がその人形を探しに交番にあらわれ、少女がトオルに逢いにきて彼女の弟と知り合いになったことが偶然過ぎるように思えた。

「それで、その、ソウ君に逢いに病院までトオル君は行ったの？」

「そうだよ。ソウ君は今、外に出られないってソウ君のおねえさんが言ったから」

「ソウ君は病気なの？」

「うん、手術をするんだって。でも元気そうだったよ。ソウ君の部屋の**バッド**からぼくらのグラウンド見えるんだ。ソウ君は野球が大好きなんだ。ぼく一度、練習の時、監督さんに内緒でグラウンドから手を振ったことがあるんだ」

「ソウ君も手を振ってたの？」

「いや遠過ぎてわからなかった」

まどべに立ってグラウンドを見つめる少年の姿が浮かんた。

「……そうだったの。それでホームランを打つ約束をしたんだ」

トオルはこくりとうなずいて小首をかしげた。

「どうしたの？」

「ソウ君のおねえさんが約束は三人の秘密にしようって言ったんだ。それを話してしまったから……」

「大丈夫よ。私とトオル君の秘密にしておくから。ソウ君のおねえさんに逢ってもトオル君から話を聞いたなんて言わない」

「でも……」

トオルは少し後悔しているようだった。

「そのかわりトオル君がホームランを打っても私が一緒に練習したからよ、って言わない」

トオルがサチコを見た。サチコは鼻に皺を寄せるようにして笑い、小指を出した。その指にトオルが小指をかけた。指切りゲンマン、二人は囁くように言って、額をつけた。

次の日も二人は空地で練習をした。

「明日は試合だね。頑張ってよ。今日の練習の感じだと打てると思うな」

「そうかな……」

「ソウ君のためでしょう。自信持たなきや」

「うん」

「そうだ。いいこと教えてあげよう」

「何？」

「晩ご飯が終った後だね」

食事が終って二人は一緒に風呂に入った。トオルの身体を洗っていると差し出した両手の指の付け根が赤くなっていた。こんなになるほど懸命にバットを握っていたのかと思うとサチコはせつなくなった。身体を洗い終えて二人は湯舟に入った。背後からトオルの身体を抱くと水の中で抱いたせいだけではなく、③その重みにやはり子供なのだと思った。その軽さが、友達のために懸命になっているトオルを余計にいいとおしく思わせた。

「ソウ君の病気早く良くなるといいね」

「うん。ぼくがホームランを打てばきっとよくなるよ。そう思うんだ」

「そうね……。ねえ、ソウ君の人形はどうしてグラウンドに落ちてたの？」

「それはね。ソウ君が看護婦さんと堤に散歩へいった日に、しばらく散歩ができないって言われたんだって。だからくやしくなって大切な人形を投げつけたんだよ」

「そうだったんだ」

——可哀相ね、外に出られないなんて……。

その言葉をサチコは胸の中に仕舞った。人形を堤の上から投げつける少年の姿が浮かんた。少年の病気が軽いものではないことがサチコにはわかった。

風呂から上がると二人は縁側に出て、並んで蜜柑を食べた。

「ねえ、ホームランの打てるおまじない」

「あつ、そうだね」

サチコとトオルはサンダルを履いて庭先に出た。サチコは夜空を見上げた。

あつ、あつた。ねえ、トオル君、ほらつ、あの星。見えるかな？ どれ？ ほら、あの青く光ってる大きな星。うん、見える。じゃおまじないを教えてあげる。こうして目を閉じてあの星に願い事を言って右手を差し出すの。こう？ そう。さあ目を閉じて願い事を言つてごらんさい。トオルが口の中で何事かを話していた。ホームランのことをちゃんと聞いた？ トオルが目を閉じたままうなずいた。友達のこと？ うん。そうしたらじつとしてよ。しつかり目を閉じてて。サチコはそつと指先を伸ばし、トオルの掌を指で突くと、飛び跳ねるようにして後ずさった。トオルが驚いて目を開けた。

「どうした？」

「今、手の中に何か落ちたよ」

「でしよう。それはかみさまにトオル君の願い事が届いて、大丈夫って返事をしてくれたのよ」

「本当に？」

④ 春が終ろうとしていた。

トオルはまだホームランを打てない。それでも先週、年少チームのゲームで生まれて初めて二塁打を打った。その話を聞くミツルも善さんも自分のことのように喜んでいた。

二塁打を打った日の夕暮れ、トオルはサチコに訊いた。

「ボクの二塁打をソウ君は見てくれてたかな？ お姉ちゃんもきてくれないし……」

真剣なまなざしでサチコを見るトオルに彼女は答えた。

「きつと見てくれてるわよ。ちゃんと届いてるわ」

サチコは姉弟のことをミツルには話さなかった。

その日はミツルのひさしぶりの休日だった。

夕暮れ、三人は※3河畔まで散歩に出かけた。グローブを手にした父と子がサチコの前を歩いていた。風に夏の気配がする。堤に出ると、ミツルとトオルがグラウンドに駆け下りて、キャッチボールをはじめた。サチコは堤の※4傾斜に座った。春先よりトオルの投げるボールは力強くなっている。それに比べるとミツルの投げ方は相変わらずぎこちなかった。二人は懸命にボールを投げていた。

――ぶきような方が上達がわかるのか……。

サチコはそんなことを思いながら、二人の姿を見ていた。父と子のむこうに何面かのグラウンドがひろがり、芝が青々と染まり出していた。グラウンドのむこうに病院の建物が見えた。サチコは目を細めて病室のまどを見たが、彼女の場所からは人影など確認できなかった。先月、⑤サチコは病院に勤める友達にソウ君のことを聞こうと思ったが、たしかめるのをやめた。大切なことは青空に舞い上がった

ボールを、皆の思いの込めったボールを、見上げていることだと思った。

ミツルの投げたボールがサチコの居る方に飛んできた。何をしてるんだか、と思ってサチコがボールを「d」ヒロおうと立ち上がった時、トオルの声がした。

「ママ、ボールを取ってよ」

サチコは思わずトオルを見た。トオルが笑ってボールの「e」コロがった方を指さしていた。サチコは斜面をゆつくりと下りると、ボールをひろいトオルにむかつて投げようとした。数メートル先にいる息子の姿がぼんやりとにじんだ。

（講談社 伊集院静『ぼくのボールが君に届けば』より。文章の一部を改めています）

（注）※1 二人の会話 Ⅱ トオルがホームランを打ちたい理由を善さんに打ち明けていた時の会話。善さんはミツルの会社の上司で、三年前まで会社の

野球チームの監督をしていた。

※2 堤 Ⅱ 堤防・土手。

※3 河畔 Ⅱ 川岸。

※4 傾斜 Ⅱ ななめになっている部分。

問一 Ⅱ 部 a ⅰ e のカタカナは漢字に直して、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 Ⅱ ※ に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息を殺して イ ヘそを曲げて ウ 肩を落として エ 胸をはって

問三 Ⅱ 部 「生返事」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いらいらしているときの、乱暴な答え
イ よく理解できないときの、あやふやな答え
ウ 混乱しているときの、めちやくちやな答え
エ 気が向かないときの、いいかげんな答え

問四 ―― 部①「対岸に咲く桜の花に照明が当たり、絹の衣が揺れているようだった」とありますが、この情景が描かれることでどのような効果がありますか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 桜を照らしている照明の輝きを描いていて、サチコとトオルの不安やわだかまりが解消されたことを感じさせる効果。
イ はらはらと散る桜のはかなさを描いていて、サチコとトオルのこれからの努力が実を結ばないことを感じさせる効果。
ウ 夜空の黒と桜の白をはっきりと描いていて、サチコのトオルへのことばが本心とはちがうことを感じさせる効果。
エ 夜桜を優しくゆらす風を美しく描いていて、サチコがトオルの心を優しく包みこんでいくことを感じさせる効果。

問五 ―― 部②「ねえ、どうしてそんなにホームランが打ちたいの？」とありますが、トオルはなぜホームランを打ちたいのですか。その理由を「ホームラン」・「ソウ君」という言葉を使って、三十字以上四十文字以内で答えなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問六 ―― 部③「その重みにやはり子供なのだった」とありますが、この説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもらしい体の軽さを実感し、手の皮がむけるほどきつい練習を続けるトオルをかわいそうに感じた。
イ 子どもらしい体の軽さを実感し、幼いながらも真剣に友人を思っているトオルをよりいじらしく感じた。
ウ 子どもらしい体の軽さを実感し、秘密をだれにも打ち明けず守ろうとするトオルをほこらしく感じた。
エ 子どもらしい体の軽さを実感し、背伸びをして無理に頑張ろうとするトオルを守ってやりたいと感じた。

問七 ―― 部④「春が終ろうとしていた」とありますが、具体的に季節の変化を感じさせるものは何ですか。本文中の言葉を使って五字以上十字以内で二つ答えなさい。（句読点は必要ありません）

問八 ―― 部⑤「サチコは病院に勤める友達にソウ君のことを聞こうと思ったが、たしかめるのをやめた」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実際の様子を確かめることより、祈りや希望を胸に抱いて信じ続けることがもっと大切だから。
イ 悪い結果を聞いてしまえば、希望を持ち続けることができずに苦しみが増えることになるから。
ウ 病状をくわしく知らなくても、子どもたちの友情に変わりはなく大人の自分には関係ないから。
エ 大人の勝手な考えで行動すると、子どもたちの純粋な気持ちを傷つけてしまうことになるから。

問九 サチコに対するトオルの気持ちの変化はどのようなところに最もよく現れていますか。十字以上二十五文字以内で答えなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問十 トオルに対するサチコの気持ちの変化の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心が離れている気がしてさびしかったけれども、トオルに対するいとしさは増し、最後は喜びをかみしめている。
イ 対等な関係を保とうと冷静に接していたけれども、トオルに対する愛情が芽生え、最後は優しさに包まれている。
ウ 自分を理解してもらえずいらだっていたけれども、トオルに対する不安が消え去り、最後は安らぎを感じている。
エ どう接すればいいかとまどい悩んでいたけれども、トオルに対する遠慮がなくなつて、最後は希望に満ちている。

受 験 番 号

得 点

問題一

問題二

問一

d	a
って	
e	b
ば	
	c

問二

A
B

問三

I
II
III

問四

--

問五

ゝ

から。

問六

感覚。

問七

ゝ

自由。

問八

--

問九

問十

ア
イ
ウ
エ
オ

問一

d	a
おう	
e	b
がった	
	c

問二

--

問三

--

問四

--

問五

問六

--

問七

問八

問九

--

問十

問十

--